

特42

832



下ノ巻



菜花の
 力復
 海人下の
 巻

橋垣わらわ
 春
 巻

三浦船下の巻
 舟中六日は春暮るひ一盤の助が旅立ち
 地を旅するまぜふけうまかみみか
 らを再ふけ地へ帰るまぜうまかみみか
 舟中六日は春暮るひ一盤の助が旅立ち
 地を旅するまぜふけうまかみみか
 らを再ふけ地へ帰るまぜうまかみみか

ひとり狗のふけむけの傷
 後井邊の助が旅立ち
 の大望を待て
 舟中六日は春暮るひ一盤の助が旅立ち
 地を旅するまぜふけうまかみみか
 らを再ふけ地へ帰るまぜうまかみみか

舟中六日は春暮るひ一盤の助が旅立ち
 地を旅するまぜふけうまかみみか
 らを再ふけ地へ帰るまぜうまかみみか

葉巻の巻

十九



「何れもつゝえひひつと今

その 上りの日とよのまゝ一し

るごふ御山まゝの常

あふく度井あふま

一より数年後とてうめう

今年い地ふ杖を引い今市在

いへり割あを故あをば後とてうめう

是のよりとび一方あらを事變とぬふ力と

合とんと細え方へる事とみ度井のつらぬ

縁と感とるねおよび周吉まぬゆひ合を

まの供おさ相替とすハ金方もるとも因縁ふ

つる色幾千の月日を送るうら 銀の(年死)

文治元年六月一日も入へのみ境れの辻へ

新編 浮城物語

二二





源氏物語

⊗大將けん抱ありて
我身へ糸糸のち
あはれごころ
しんがやいも
まがざりける
うらやも
あらしのま
あしひらま
甲乙二人の
あはれごころ
あらしのま
あしひらま

次五



源氏物語
松竹と
金糸の初
あはれごころ
あしひらま
あしひらま
あしひらま

あしひらま
あしひらま
あしひらま
あしひらま
あしひらま
あしひらま
あしひらま
あしひらま
あしひらま
あしひらま

源氏物語

二十一



義経三郎の助をたす

大和流山まゝの

三人ありし時

盤の助ハ甲

變く〜

〜

ウ字小後

いりの格指

がそむへそむ

より〜

〜

〜

去る十年より安政元年十月二日大和流山の



盤の助

今日

今日

今日

今日

今日

金方より〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜

〜



池山が
 刀をさ
 海をさ
 今に統る
 かけ
 生か
 身はさ
 いか
 ひか

〇中へ入る
 〇池山が
 〇切つ
 〇不
 〇池山が
 〇切つ
 〇不
 〇池山が
 〇切つ
 〇不



池山が
 刀をさ
 海をさ
 今に統る
 かけ
 生か
 身はさ
 いか
 ひか

池山が
 刀をさ
 海をさ
 今に統る
 かけ
 生か
 身はさ
 いか
 ひか



上—うん勝る者ほほふ
 不—台—後をきて死ぶふ
 樹—盤のぬへ細えの義後
 と感—辱くれを迷下馬
 めろとも大板—ひのり—
 先—は日地—の
 中—居とあ—
 と告げ—
 を引—
 うば—
 お—
 ち—

中—有つ—ゆ—
 ふわめて白日—
 仲—あり—
 の平—合



台母の—
 母—
 先—
 報—
 へ—
 ねど—
 せ—
 心—
 あり—
 へ—
 台母の—
 女—
 の—

業腹者三編下



つぎ
 うら
 むして
 いち
 平了
 の旅
 らを
 こま
 女
 かろ
 長
 親
 の



と結
 むま
 数
 鉄
 の
 の
 猛
 多
 由
 つ
 麻
 鉄

業勝巻三十一

三十一

細元あき

橋塘著



ついでに... 業勝君の... 餘りの... 余りの... 余りの...

明治十一年八月五日
神田仲町二丁目六号地
編者 篠田又次郎
出版者 荒川藤兵衛
日御届

業勝君名譽復讐

初編 二編 三編 近刻

袋入三冊 讀切美本 太閤記類種々

袋入三冊 讀切美本 復讐并實録物各品

上下二冊 讀切美本 軍談復讐實録代記數種

當世流行 大津急流都下名色

男女用文諸證文字引類數品

新撰小本草紙傳記類數品

作文書類女子讀物類品々

塵劫記類和漢文章類各種

各府縣中小學校諸教課書類出版大販賣處

東京日本橋區馬喰町貳丁目九番地
錦耕堂 荒川藤兵衛版
錦繪問屋 山口屋

